

潜在自我意識 (papañca) と認識 (saññā) の転換

—— Atthakavagga の記述による ——

中 谷 英 明

1. パーリ聖典の三層構造

筆者は 1991 年から 94 年まで文部省科学研究費によるパーリ仏典データベースの作成を行った¹⁾。この Nikāya と Vinaya のデータベースを用いて音韻、語形、韻律の分析を行い、また伝承状況、内容を考慮し、*Suttanipāta* が制作時代の異なる三層から成ることを報告した²⁾。その後さらに Nikāya と Vinaya の全体を含めて三層を推測した³⁾。

三層を表示すれば下記のようなになる。

<i>Suttanipāta</i>				他のパーリ聖典
層	部	構成部分	詩節数	
I 層	I 部	IV. Atthaka-Vagga, 766–975.	210	—
	II 部	I. Uruga-Vagga, Khaggavisāna-Sutta, 35–75 V. Pārāyana-vagga, 1032–1149.	159	
II 層	III 部	I, II, III Vaggas (35–75 および序偈を除く)	702	韻文: Dhp, SN, Th, ...
III 層	IV 部	序偈 (335–336 ; 679–698 ; 976–1031)	78	大部分散文: Nikāya, Vinaya
	V 部	散文部 (I, II, III vagga 内に散在)		

周知のごとく Wilhelm Geiger は *Pāli Literatur und Sprache* (Strassburg, 1916) の中で、パーリ聖典の言語に 4 段階の発展を確認している。それは、(1) サンスクリット、ヴェーダ語と語形がよく対応する語を多数含む韻文 (Gāthā 言語)、(2) 古形対応語形が減少し、より均質な言語で書かれる散文聖典の言語、(3) *Milindapañha*、注釈文献等の後期散文聖典の言語、(4) 種々の時期の語形を織り交ぜて作られた後代韻文文献の言語、の 4 種である。筆者の三層は Geiger の最初の二層にほぼ相当し、Geiger の最古層韻文 (Gāthā 言語) をさらに二層に分かつものである。従って、後期散文聖典、後代韻文文献の二種はさしあたり考察の外に置いている。

(208) 潜在自我意識 (papañca) と認識 (saññā) の転換 (中 谷)

2. 三層の内容と推定成立年代

Suttanipāta (= Sn) において言語事象や伝承様態が示唆する上記三層構造は、内容にも反映している。第一層には僧伽や在家信者の記述はなく、孤独な遊行が推奨される。また意識の形成、意識の背後にある自我意識の省察、遊行生活の記述に主眼が置かれる。第二層において初めて僧伽という言葉が現れ、在家の戒が説かれる。入門儀礼の定型句や、三法印、四聖諦、五蘊、十二支縁起等、教理の基本概念が現れる。第三層において大規模僧伽が成立し、Nikāya, Vinaya が現在の形で定立されたと推定される。

各層間の年代的懸隔ならびに絶対年代を示唆する事象に関しては、【中谷 2003】に報告した。I層は前4世紀、II層は前3世紀、III層は前2世紀ころの制作と想定される。現パーリ聖典は、定立時より古いテキストの言語や韻律を標準化せずそのまま伝えてきた。今後のパーリ聖典の研究は、この三層の区別を無視してはあり得ないであろう。

3. *Suttanipāta* 862–874

最古層 (I層) は Sn の第4章 *Aṭṭhaka-vagga* (= Av) と第5章 *Pārāyana-vagga* (= Pv) から成るが、Av が Pv より若干年代が古いことを示唆する点がある。従って以下に考察する Av の中の一節、Sn 862–874 は、最古層中の最古テキストとしてブッダの思想を最も忠実に伝える。13詩は6組の問答を成し、争いという行為を結果する意識の形成過程を問答の形で順次明かしている。

862. kuto pahūtā kalahā vivādā paridevasokā saha-maccharā ca /
mānātimānā saha-pesuṇā ca kuto pahūtā te tad iṃgha brūhi //

争い、論争が何から生じるか。また悲嘆と苦悩、そして嫉みは、
高慢、傲慢、および中傷は、これらが何から生じるか、それをお話し下さい。

863. piyā pahūtā kalahā vivādā paridevasokā sahamaccharā ca /
mānātimānā saha-pesuṇā ca /
macchariya-yuttā kalahā vivādā vivāda-jātesu ca pesuṇāni //

愛しい想念から、争い、論争が、悲嘆、苦悩、および嫉みが、
また高慢、傲慢、および中傷が生じる。
嫉みに基づいて争い、論争が、また論争を起こした人々の間では中傷が。

864. piyā su lokasmim kutonidānā ye vā pi lobhā vicaranti loke /
āsā ca niṭṭhā ca kutonidānā ye samparāyāya narassa honti //

もろもろの愛しい想念、すなわち人々に蔓延る貪りの念は、そもそも人々におい

て何から起こるのか。

また人の来世に対する願望と執心とは何から起こるのか。

865. chandā-nidānāni piyāni loke ye vā pi lobhā vicaranti loke /

āsā ca niṭṭhā ca itonidānā ye samparāyāya narassa honti //

もろもろの愛しい想念, すなわち人々に蔓延る貪りの念は, 感情に基づいて人々に起こる。

また人の来世に対する願望と執心もそれに基づいて起こる。

866. chando nu lokasmim kutonidāno vinicchayā vā pi kuto pahūtā /

kodho mosavajjañ ca kathaṃkathā ca ye vā pi dhammā samaṇena vuttā //

人々の感情は何に基づいて起こるのか。あるいは判断は何から生じるのか。

また怒り, 偽り, 疑い, すなわちかの沙門が説かれた諸々の情念は (何から生じるのか)。

867. sātāṃ asātaṃ ti yam āhu loke tam ūpanissāya pahoti chando /

rūpesu disvā vibhavaṃ bhavañ ca vinicchayaṃ kurute jantu loke //

快, 不快と人々に言われるもの, それに基づいて感情は生じる。

諸々の対象物に得と失とを認めて, 世の人は (快, 不快と) 判断する。

868. kodho mosavajjañ ca kathaṃkathā ca ete pi dhammā dvaya-m-eva sante /

kathaṃkathī nāṇapathāya sikkhe ñatvā pavuttā samaṇena dhammā //

怒り, 偽り, 疑い, これらの情念は二つのもの (快・不快) がある時にある。

疑いを生じる人は知の道を学習すべきである。かの沙門はそれら情念を知り, 説き明かされた。

869. sātāṃ asātāñ ca kutonidānā kismim asante na bhavanti h' ete /

vibhavaṃ bhavañ cāpi yam etam atthaṃ etam me pabrūhi yatonidānaṃ //

快, 不快は何に基づいて生じるか。これら両者は, 何が無くなる時, 無くなるか。

その目安となっている得と失についても, 何に基づいているかを, 私に説明下さい。

870. phassanidānaṃ sātāṃ asātāṃ phasse asante na bhavanti h' ete /

vibhavaṃ bhavañ cāpi yam etam atthaṃ etam te pabrūmi itonidānaṃ //

感覚に基づいて快と不快が起こる。感覚が無い時, これらは無い。

その (快と不快の) 目安となっているこの得と失もこれ (感覚) に基づいていると, 私はあなたに説明する。

871. phasso nu lokasmim kutonidāno pariggahā vā pi kuto pahūtā /

kismim asante na mamattam atthi kismim vibhūte na phusanti phassā //

人々の感覚は何から起こるのか。あるいは所有はどこから生まれてくるのか。

何が無いとき, 我が物は無いのか。何が消え去ったとき, 感覚は感覚しないのか。

872. nāmañ ca rūpañ ca paṭicca phassā icchānidānāni pariggahāni /

icchā na santya na mamattam atthi rūpe vibhūte na phusanti phassā //

名称と対象物に基づいて感覚が起こる。欲求に基づいて所有がある。

欲求が無い時, 我が物ということがない。対象物が消え去った時, 感覚は感覚し

(210) 潜在自我意識 (papañca) と認識 (saññā) の転換 (中 谷)

ない。

873. kathamsametassa vibhoti rūpaṃ sukhaṃ dukkhaṃ vāpi kathaṃ vibhoti /
etam me pabrūhi yathā vibhoti taṃ jāniyāma iti me mano ahū //

どのような境地に到達した人に、対象物は消え去るか。また楽と苦はどのようにして消え去るか。

いかにして消え去るか、それを私にお教え下さい。それを知りたいと私は思いました。

874. na sañña-saññi na visañña-saññi no pi asaññi na vibhūta-saññi /
evaṃsametassa vibhoti rūpaṃ saññā-nidānā hi papañca-samkhā //

認識を認識しているのではなく、認識ではないものを認識しているのではなく、認識していないのではなく、消え去ったものを認識しているのではない人、このような境地に到達した人に対象物は消え去る。「可熟物」と呼ばれるものこそ、認識の基である。

4. 文献学的注釈

(1) 複合語の解釈：863e

vivāda-jātesu (863e) を *Niddesa* 及び *Paramatthajyotikā* は vivāde jāte と絶対構文に解したようであるが⁴⁾、vivāda-jāta- は Pāṇini. 2. 2. 37: vāhitāgnyādiṣu. 「āhita-agni-等においては、場合によっては(先の 2. 2. 36 の規程に関わらず、niṣṭhā すなわち過去分詞 (-ta 及び -tavat) を前分とせず後分として bahuvrihi 複合語を作ることが)できる。」によって jāta-vivāda- 「論争を起こした人」と解する方がより自然であろう。

(2) rūpa 「形態」と nāma 「名称」：872a

nāma 「名称」と rūpa 「形態」が一对のものとして考察対象となるのは少なくとも *Śatapatha-Brāhmaṇa* (= ŚBr) に遡る⁵⁾。そこではブラフマンが世界の諸物を創造しそれらの中に nāma と rūpa という二形で入り込むことが語られ、nāma と rūpa は互いに優位を主張するが、意味外延が rūpa は nāma より広いとして rūpa の優位が確認される⁶⁾。872 において nāma と rūpa が共に挙げられながら、873、874 では rūpa のみが言及されるのは、この「常識」に基づいて意味範囲の広い rūpa によって代表させたものと考えられる。

ŚBr 11, 2, 3, 1-6 : brahma vā idam agra āsit. tad devān asrjata.... tat parārdham gatvaikṣata kathaṃ nv imāṃ lokān pratyaveyām iti. tad dvābhyām eva pratyavaid rūpeṇa caiva nāmnā ca. sa yasya kasya ca nāmāsti tan nāma. yasyo api nāma nāsti yad veda rūpeṇedaṃ rūpaṃ iti tad rūpaṃ. etāvad vā idam yāvad rūpaṃ caiva nāma ca tayor anyataraj jyāyo rūpaṃ eva. yad dhy api nāma rūpaṃ eva tat

初めにブラフマンがいた。彼は神々を創出した。…世界の端まで出かけて考えた。いかにしてこれらの世界に入り込もうか。そこで二つの方法で、すなわち形態と名称として入り込んだ。名称を持つものは何であれそれは名称である。名称を持たぬもの、これは形態であると形態として知られるもの、それは形態である。形態と名称としてある限りのもの、それがすべてである。…両者のうち、相手に勝るものは形態である。なぜなら名称であるもの、それは形態であるから。…

(3) Triṣṭubh 転部の韻律：873d

Triṣṭubh 転部における3短音(UUU)と語切れの関係が、I層とII層とで異なる。873dは、--U-|U, UU|-U-U-という形のTriṣṭubhである。転部3短音節においては第5音節後に語切れが来る(U, UU)⁷⁾。この規則はI層では厳守されるが⁸⁾、II層(Sn, Dhp)では第4音節後の語切れが(UUU)が8例現れる⁹⁾。層によって韻律形が相違する一例である。

5. Suttanipāta 862–874 の理解

(1) 862–874 の概念図：二系列と saññā, papañca

ここに述べられる因果的連関は、表2のように図示することができる。866以降、主連鎖を成す事象(第1系列)と、副次的事象(第2系列)が認められ、第2系列事象が第1系列事象に影響を与えると解し得る。従って874のpapañcaはsaññāを左右すると想定される。

862	行為	= 争い, 論争, 悲嘆, 苦悩, 嫉み, 高慢, 傲慢, 中傷
	↑	
863, 864	愛しい想念 piya	= 貪り lobha, 来世への願望 āsā, nitṭhā
	↑	
865, 866	感情 chanda	= 怒り, 偽り, 疑い ⇐ 判断 vinicchaya (情念 dhamma)
	↑	⇐ 得失 bhava-vibhava (↑)
867, 868	快不快 sāta-asāta	
	↑	⇐ 所有・我が物 pariggaha, mamatta
869, 870	感覚 phassa	
	↑	⇐ 欲求 icchā, 楽苦 sukha-dukkha
871, 872, 873	対象物 rūpa・名称 nāma	
874	認識 saññā <第1系列>	⇐ 可熟物 papañca <第2系列>

(2) saññā の意味

1) saññā と欲望

Avにおけるsaññāの用例は7例である。847はsaññāに執着しなければ束縛が

(212) 潜在自我意識 (papañca) と認識 (saññā) の転換 (中 谷)

ないと言う。束縛とは欲望による束縛に他ならない（例えば 857 参照）から、saññā への執着は欲望による束縛を生むと解される。以下、saññā には仮に「認識」という訳語を当てる。

847. saññā-virattassa na santi ganthā paññā-vimuttassa na santi mohā
saññañ ca diṭṭhiñ ca ye aggahesum te ghaṭṭayantā vicaranti loke

認識にとらわれない人に束縛はない。真知によって解放された人に妄想はない。しかし認識や見解に執着してしまった人々は、この世において困難に遭遇しつつ生きてゆく。

779 は、saññā を知ることが所有 pariggaha への無執着を結果し、欲望という矢を抜くことになると言う。pariggaha は mamatta 「我が物（意識）」(871, 872) とも言われる利己的所有意識である。

779. saññaṃ pariññā vitareyya oghaṃ pariggaheṣu muni n'opalitto
abbūḷha-sallo caraṃ appamatto n' āsiṃsati lokam imaṃ parañ ca

認識を深く知って、奔流を渡りなさい。ムニは種々の所有に執着することはない。矢を引き抜いて、不放逸のまま遊行し、この世もあの世も希求しない。

792 は、saññā に執着する人は道に迷い、知者は dhamma（生き方）を知り、迷うことはないと言う。

792. sayam samādāya vatāni jantu uccāvacaṃ gacchati sañña-satto
vidvā ca vedehi samecca dhammaṃ na uccāvacaṃ gacchati bhūripañño

自ら誓戒を立てながら、認識に執着する人は右往左往する。しかし明知広大な人は、叡智によって知り、生き方を確立して、右往左往することはない。

2) saññā と diṭṭhi

Av において saññā はしばしば（7 例中 4 例：802, 841, 847, 886）、diṭṭhi 「見解」と共に現れる。上記 847c における両者並列が 847ab と並行関係にあるならば、saññā への執着が gantha を生み、diṭṭhi への執着が moha を生む、と解され、両者に意味の差が認められる。

886 は常在するのは saññā のみであると言う。

886. na h'eva saccāni bahūni nānā aññatra saññāya niccāni loke
takkañ ca diṭṭhiṣu pakappayitvā saccam musā ti dvayadhammam āhu

この世界において、多数の、それぞれ別の恒常的真実はない。在るのは（個別の）認識ばかり。人々は諸々の見解において理論を構築し、これは真実、これは誤謬という二元論を語る。

802 は、「経験、知識、思索における構想された saññā」がない人は ditthi に捉われないと言い、「妄想された saññā」と ditthi を等置している。

802. tassīdha ditthe va sute mute vā pakappitā n' atthi añū pi saññā

taṃ brāhmaṇaṃ ditthim anādiyānaṃ kenīdha lokasmiṃ vikappayeyya

その人は此処において、経験、知識、あるいは思索において妄想された認識が—
かけられない。見解に捉われないそのバラモンを、何がこの世において妄想させ
ることができようか。

841 は ditthi に基づくという誤謬を犯している人にはブツダの saññā は見えない、
という。

841. ditthiñ ca nissāya anupucchamāno samuggahītesu pamoham āgā

ito ca nāddakkhi añum pi saññaṃ tasmā tuvaṃ momuhato dahāsi

(あなたは自分の) 見解に基づいて尋ねている。いろいろのことを誤って信じ、
誤謬に至っている。従って(私の) 認識は、ほんの僅かもあなたには見えない。
だからあなたは(それを) 妄想だと主張するのである。

要するに、saññā には、謂わば誤った saññā と正しい saññā がある。経験、知識、
思索における誤った saññā が ditthi であることからすれば、saññā の意味は「認識」
という言葉にほぼ対応すると考えられる。

(3) papañca の意味

nidāna- を後分とする複合語は bahuvrīhi と解するのが自然である (865, 870, 872)。しかし 874d saññā-nidānā を同様に読めば、「papañca は saññā を基とする」となり、第2系列が第1系列を左右するという原則から逸脱する。また迷った saññā と悟った saññā の両方が papañca を生じることになって、papañca の意味の理解に苦しむ(874 は悟った saññā を主題としている)。ここは tatpuruṣa として「papañcaこそ認識の基である」と読むべきであろう。papañca が saññā を迷わせ、papañca が除去された時に正しい saññā となるのである。このように聞き手に誤解させる言い方をしておいて、「実はこうである」と驚かせる詩的技巧は仏教詩には珍しくなく、Sn もその例外ではない¹⁰⁾。

では papañca とは何か。Av には他に一つだけ用例がある。今仮に「可熟物」という訳語を付して示す。

916. mūlaṃ papañca-saṃkhāyā mantā asmī ti sabbam uparundhe

yā kāci taṇhā ajjhataṃ tāsam vinayā sadā sato sikkhe

「私が思う」という、可熟物と呼ばれるものの根源をすべて閉鎖し、

(214) 潜在自我意識 (papañca) と認識 (saññā) の転換 (中 谷)

内面にある渴欲は何であれその除去を、常に細心の注意を払って修習しなさい。

「私が思う」という表現は、871, 872 の pariggaha 「所有欲」, mamatta 「我が物意識」を思い起こさせる。その「私であるという思いが papañca の根源であると言う。それは「内面にある渴欲」とも言い換えられる。

Sn の II 層には papañca の用例は 2 例あり、そのうち次の 1 例は興味深い。

530. anuvicca papañca-nāmarūpaṃ ajjhataṃ bahiddhā ca roga-mūlaṃ
 sabba-roga-mūla-bandhanā pamutto anuvidito tādi pavuccate tathattā
 妄念と名称・形態という、内と外の病の基を省察し、
 あらゆる病の基の束縛から解放された人、そのような人こそまさに賢者と呼ばれる。

1 世紀ほど後代の作ではあるが、ここで papañca は外の病である nāma-rūpa に対して内の病のもとと言われ、916 の「内面の渴欲」とよく対応する。要するに papañca は、こころの内に潜む「自利を図る欲求」、あるいはその欲求の根源にある「自我意識」、と言える。この自覚し難い自我意識の払拭によって認識のあり方が転換し、自然で自由なところが実現するのである。

(4) papañca の語源

Av においては自分の見解 ditthi を乗り越えることの不可能性が繰り返し説かれる。

781. sakaṃ hi ditthiṃ katham accayeyya chand'ānuniṭṭo ruciyā niviṭṭho
 sayam samattāni pakubbamāno yathā hi jāneyya tathā vadeyya
 自分の見解をどうして越えられようか、感情に取り付かれ、欲情に捉えられた人が、人は自らの理解を作り上げつつ、自分が知ったことをそのまま主張するであろう。

Av における 2 用例では、papañca は共に papañca-saṃkhā 「papañca と呼ばれるもの」という形で使われる。実は papañca は先立つ文献に用例がなく、中期インド語にも自然な痕跡が残されていない。恐らくブツダの新造語ではなかったか。人間心理の最奥に潜在する情念を発見したブツダはこの語を新造し、悟りの境地への転換の契機として説いたと考えられる¹¹⁾。

語源として考えられる古代インド・アーリア語形は何か。筆者は、pra-pac- 「熟成しゆく」の派生語、*pra-pacya- 「熟成して来るもの」を想定し、*pra-pacya- > *papacca > *papāca > papañca という変化を考えている。困難なのは、*papāca > papañca という変化であるが、唇音環境 (p__p__) において母音が唇音化すること

は時に起こる現象である¹²⁾。他語形からの類推が重なることもあり得る。Turnerの辞書¹³⁾によれば、北西インドの Shina 語には語根 pac- の 3 sg. *pañcati に対応する形 pážeḥ が残る。Turner はこれを mūčeḥ < múcyatē ~ mužeḥ < muñcāti からの類推によるとする (Turner 7654) が、音韻環境の寄与もあり得る。

別の可能性として、北インド Nepali の pājnu という形に残る pañcati 「広げる」 (Turner 7660) がある。これは中期ウパニシャッド、大乘仏典などに残る prapañca 「拡張、多様性」に連なる語であるが、papañca が潜在支配的自我意識であるならば、「多様性」は採り難く、「拡張」ならあり得るが、意識の背後に隠れていて「熟成して来るもの」がより相応しいであろう。拙訳として「可熟物」を用いた所以であるが、この点は今後さらに検討を重ねたい。

6. むすび

ŚBr (10. 6. 3) において初めて提示された個人 (祭司) のこころの在り方への関心は、*Brhadāranyaka-Upaniṣad* (4. 4. 5-7) において展開され、人は欲望 (kāma) からなり、欲望から意欲 (kratu) が作られ、意欲に応じて行為がなされる、無欲望の人こそ至福のブラフマン世界に入る、と言われる¹⁴⁾。ブッダはこの「意識が行為を作るという思想を精査し、遂に潜在自我意識 papañca を発見したのであった。

ブッダの今一つの重要な発見は、papañca の除去法に関する。それは自分のこころの反省と孤独な遊行という「行為によって意識が変わる」、という事実である。遊行そのものは Yājñavalkya の「出家」に見られるように当時知られていたが、その行為に papañca の除去という心理的目標を明確に設定し、高潔な人格の具現という目的へと組織立てたのは、ブッダの功績であった。この点に関しては近刊の拙論 (注 11 参照) に詳説している。

1) 「パーリ三蔵データベースの構築と仏典研究」(共同執筆者: 江島恵教)『パーリ学 仏教文化学』8号 pp.123-147. 東京・平成7年。

2) 「スッタニパータについて」『日仏東洋学会通信』22号 pp.5-17. 東京・平成10年。

3) 中谷英明「ブッダの魂論」『論集・古典の世界像』文部省科学研究費補助金特定領域研究「古典学の再構築」研究成果報告 V, pp.32-50. 神戸・平成15年 = 【中谷 2003】

4) ただし Niddesa は 'vivāde jāte...pesuññaṃ upasaṃharanti' 「(論争する) 彼らは中傷を行う」とするから vivāda-jāta- を「論争を起こした人」と解しているとも取れる。

5) nāma と rūpa の一対は古く *Ṛgveda*, 5.43.10, *Atharvaveda* (Paipp.), 16.82 に現れる。

6) rūpa の優位が確認されるのはこの個所だけではない。ŚBr の別の個所 (1.4.5.8-11)

(216) 潜在自我意識 (papañca) と認識 (saññā) の転換 (中 谷)

では, nāma と rūpa を夫々代表する vāc と manas の競争が描かれ, そこでもまた manas の優位が宣言される. Sylvain Lévi, *La doctrine du sacrifice dans les brāhmanas* (Paris, 1898), pp. 29–30 参照.

- 7) ‘brève devant une coupe a cinquième’ (H.Smith, *Les deux prosodies du vers bouddhique*, Lund, 1949–50, p.6).
- 8) ただし Pārāyana-vagga 1143c における (,UUU) は vajati (UU-) の読みによって回避される.
- 9) Sn 63c, 317d, 353a, 487d, 488b, 489b, 505b ; Dhp 54b.
- 10) 例えば 808. akkheyya- 呼ぶべき / 不滅の ; 919 atta- 自己 / 獲得されたもの ; 345 ; 656 sakka- サキヤ / シャクラ, 等の掛け言葉や 806d na mamattāya nametha māmako の m 音の繰り返し等. 同様の詩的技巧については, Y. Ojihara, H. Nakatani, “Dharmasamuccaya (Éd. Lin), Chapitres XVII–XXXVI. *Asiatische Studien*. XLVI, pp.323–351. Lausanne, 1991 参照.
- 11) papañca と並ぶ重要語彙である dhamma も, ブッダが新しい意味と用法を創造した言葉であることに関しては, Hideaki Nakatani, ‘Buddha’s scheme for forming noble-minded generalists in a society’, *Social Science Information*, Paris, January, 2011 参照.
- 12) W. Geiger, *Pali Literatur und Sprache*, § 18.1; 中谷英明『スバシ写本の研究』p. 48, § 64; K.R. Norman, *The Group of Discourses*, p. 153, note on 61.
- 13) Turner, R. L. *A comparative dictionary of Indo-Aryan languages*. London : Oxford University Press, 1962–1966.
- 14) 中谷英明「[しなやかな知]の探求—古典学と自然科学との共同作業から」『日仏学術交流のルネッサンス報告論文集』pp. 146–155. 日仏会館 (東京)・平成 21 年参照.

〈キーワード〉 papañca, saññā, パーリ仏教, ブッダ, Aṭṭhaka-vagga, Suttanipāta, Pali Canon, 意識の形成, 認識の転換, 潜在欲求, 自我意識, 遊行
(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授, パリ大学博士)